

# 展評

真喜志 勉

大浜用光が数人の仲間と力を出しあって、大山ペプシの向かいに実験の場として画廊・匠をスタートさせた。昨今のコマーションギャラリープームの中で二服の清涼ドリンクを飲む思いである。

グループ「耕」の残留孤児としての大浜が長い失語から立ち上がり「土もの」を引っさげて、美術の狂乱の巻(ちまた)にもどって久しい。

大浜は寡黙なスタイリスト

で民衆から遊離したニヒルな存在である。が、また、手間隙かけて心をこめて漉(す)いた上質の和紙のような温かなお人柄でもあるのだ。さらに云えば、狂人空間と天才空間が裏でメビウスの輪のよう

## 頭在化する作家の良心

### 大浜用光展

にエンドレスなのを知っている。狂気の沙汰につっぱしって行ったと思えば、気がついた時には、天才の側から顔をのぞかせる、という厄介な人でもあるのだ。

白いキャンパスは近づきがたい拒絶感と同時にまた何事をも受け入れる誘惑の素地を

ひそめている。それを汚したさし満ちて「土」と「火」を素材にした大浜作品は静まり返っていた。

マルセル・デュシャンの『ほごりの堆積が眼底に浮んで来た。ほごりの堆積はもとより再現不可能で、限りなく

さし満ちて「土」と「火」を素材にした大浜作品は静まり返っていた。

マルセル・デュシャンの『ほごりの堆積が眼底に浮んで来た。ほごりの堆積はもとより再現不可能で、限りなく

あからさまな答、余りにも整った姿には共感をおぼえな

い。また、見せつける苦悶の姿には同情すらしない。

いわゆる無表情の中の表情、つかみどころのない美し

大浜作品のもつ、挑発や美

験性、攻撃性は、俗物を憤激させ、憤激を通して恥し入らせ、めめさせるに充分だが、しかし真に大浜をつき動かしているのは、けっして喧騒や論議のものではなく、

「今・どこへ？」というどこまでも基本的な作家の良心にむけられた精神的、倫理的なマニフェストに他ならぬ。

(画家)

同展は20日(日)まで画廊・匠(宜野湾市大山)で開催中。